

漢代における『論語』の伝播

湯 浅 邦 弘

序 言

今から二千数百年前の古代文献が次々に発見される。そうした劇的な事態がこの数年、中国で続いている。多くは古墓からの盗掘であり、その結果、古代文献である大量の竹簡が流出する。近年、最も注目されているのは、上海博物館が収蔵した戦国時代の楚の竹簡、いわゆる「上博楚簡」であろう。現在、『上海博物館蔵戦国楚竹書』として分冊方式で公開が進められている。この中には、『論語』や孔子との関係が認められるものが、いくつか確認されている。『論語』は最も著名な中国の古典であるが、実のところ、その成立や伝承の過程は謎に包まれている。

一方、漢代初期の墓から『論語』そのものの写本が出土する例もある。これは、漢代において『論語』がどの地域までどのように伝播していたのかを探る有力な手がかりとなるであろう。

そこで本稿では、『論語』形成史を考究する一環として、戦国期における『論語』（あるいはその素材）の伝承の状況を上博楚簡によって確認した上で、特に、漢代における『論語』テキストの伝播の様相を、二つの出土文献によつて考察してみることとしたい。

一、上博楚簡と『論語』

まず、上博楚簡の内、『論語』や孔子に関わる文献を簡潔に確認してみよう。

『孔子詩論』（『上海博物館蔵戦国楚竹書』第一分冊所収）……今本『詩経』の内容と一部類似する点があり、要所要所に孔子の言葉が引用されている。孔子は詩について造詣が深かったと言いたげな文献である。

『從政』（第二分冊所収）……政治に従事する際の

心得を説いた文献。ここでは、「從政(者)」と「君子」とがほぼ同じ意味で使われている。「從政」とは、政治に従事するという意味。その「從政」者・「君子」とは、国政を左右できるような地位の人である。また、この文献から、儒家集団の中で、「君子」と孔子とが同一視されていたことが分かる。

『仲弓』(第三分冊所収)……孔子が弟子の仲弓の質問に答える語録。孔子の政治見解を示す貴重な資料。他の伝世文献には見えない。仲弓は前五二二く？、姓名は冉雍、仲弓はその字。孔門十哲の一人で、德行にすぐれていたとされる。

『季庚子問於孔子(季庚子孔子に問う)』(第五分冊所収)……魯の家老季康子(上傳楚簡の原文は「庚」と表記する)と孔子とが、国の統治について問答するというもの。『論語』の中にも、季康子と孔子の問答は見えるが、ここは重ならない。

『君子為礼』(第五分冊所収)……孔子と弟子との問答を中心とする文献。文中に登場する人物は、孔子・顔淵・子羽・子貢などである。前半部は孔子と顔淵との「礼」と「仁」の関係についての問答、後半部は子羽と子貢とが、孔子と鄭の宰相子産のどちらが賢人であるかという内容の問答を行っている。

『弟子問』(第五分冊所収)……孔子と弟子の問答で構成される文献。孔子と宰我・顔淵・顔淵と子由、子羽と子貢などの問答を含み、その内容は多様である。ま

た、『論語』学而篇の「巧言令色、鮮なし仁」に類似する文言も見られる。

『孔子見季桓子(孔子季桓子に見ゆ)』(第六分冊所収)……孔子と魯の大夫季桓子との談話で構成される文献。

『顔淵問於孔子(顔淵孔子に問う)』(第八分冊所収)……弟子の顔淵が、国内の政事に従事する際の要諦を孔子に質問するという内容の文献。

この内、『論語』における孔子の言葉と極めて類似性が高い内容を持つ『從政』については、すでに考察を加えたことがあるので、以下では、『仲弓』と『顔淵問於孔子』について、その関連性を確認してみよう。

まず、『仲弓』は、弟子の仲弓に対して孔子が政治上の助言をするという内容である。孔子の言葉として四つの事項が並列で説かれている。なお、【一】内は、原文の欠字を補ったものである。

仲尼【曰】、老老慈幼、先有司、舉賢才、宥過赦罪。

仲尼曰く、老を老い幼を慈しみ、有司を先にし、賢才を挙げ、過を宥し罪を赦せ。

第一。老人を敬い幼児を慈しむこと。第二。有司(役人)に率先して仕事をさせること。第三。賢人を登用すること。第四。多少の過ちや罪は許すこと。これが政治

の要諦だといふのである。

この言葉は、『論語』子路篇にそっくりの一文が見られる。

仲弓季氏（し）の宰と為り、政を問う。子曰く、「有司を先にし、小過を赦し、賢才を挙げよ」。(子路篇)
仲弓が季氏の長官となり、政治について質問した。孔子は答えた。「役人に率先してやらせ、その結果、多少の過ちがあつても許し、また、じっくり観察してから賢人を登用せよ」と。

上博楚簡『仲弓』は、紀元前三百年頃までには成立したと推定される文献である。²⁰『論語』とどちらが早かったかは分からないが、これほどよく似た言葉がある以上、どちらかがどちらかに影響を与えたことは充分に推測されよう。

ただ、『論語』では、有司（役人）に力点が置かれている。まず役人に職責を全うさせてみて、その結果、多少の過ちがあつても許すという文脈である。これに対して『仲弓』は、四つの事項がすべて並列となつている。しかも老人や幼児への思いやりが第一に記されている。どちらが本来の姿であつたかどうかは分からないが、これも伝承の過程で、孔子の言葉にかなりの揺れが生じていたことを示す一例であろう。

この『仲弓』に関連して、『顔淵問於孔子（顔淵孔子

に問う）』も注目される。

ここでは、弟子の顔淵（顔回）が、孔子に「君子が国内の政治に従事する場合にどのような道がありますか」と問う。孔子の答えは次のようなものであつた。

孔子曰、「敬宥過、而【先】有司、老老而慈幼、豫絞而收貧、祿不足則請、有餘則辭。
孔子曰く、「敬みて過ちを宥して有司を【先】にし、老を老いて幼を慈しみ、絞を予して貧を収め、祿足らざれば則ち請い、余り有れば則ち辞す」。

孔子は言われた、「謹んで過失を許し、役人に率先してやらせ、老人を敬い幼児を慈しみ、徴税を猶予して貧困者を収容し、俸祿が不足していれば請求し、余裕があれば辞退する」。

これも、上博楚簡『從政』や『論語』子路篇と類似するが、また微妙に異なつてもいる。共通するのは、過ちを許すという寛大な精神と、役人に率先してやらせるといふ点であるが、その順番が『論語』とは異なる。また、『論語』や『仲弓』にはない要素として、俸給の過不足への対応という問題がある。明らかに、孔子集団の内の誰かが役人として採用され、国政に従事した場合を想定している。

このように、上博楚簡と『論語』との間には、興味深

い関係が認められる。一方で、その微妙な文言の違いは、伝承の過程で孔子の言葉に一定の揺らぎが生じていたことをも示唆している。孔子の言葉は、一直線に『論語』へと向かったのではなく、弟子門人たちの様々な伝承の過程を経て、ようやく『論語』として完成を見たのである。

それでは、戦国時代における複雑な編纂の過程を経て、次の漢代に入り、『論語』はどのように伝播し、定着していったのであろうか。その問題について、また別の新出土文献から検討を加えてみよう。

二、定州簡『論語』

新出土文献の発見によって、『論語』編纂の過程を垣間見ることができるようになった。近年出土した戦国時代の竹簡資料には、『論語』の文言に極めてよく似た語句が見られるものがある。遅くとも秦漢帝国成立（紀元前三世紀頃）以前には、『論語』の素材はさまざまに流伝していたのであろう。

ただ、当時、『論語』は、主として儒家の内部で共有される文献だったと推測される。それが、天下に流布していくのは、漢代に入ってからである。漢帝国は儒教を国家教学として尊重した。国家の後ろ盾を得て、『論語』は広く普及していったのである。

その様相の一端を示す新資料が、近年発見された。ま

ずは定州漢墓竹簡『論語』である。一九七三年、河北省定州市で発見された前漢の中山懷王劉脩の墓から出土した竹簡に記されていたもので、現存最古の『論語』写本である。この墓は、前漢末に盗掘にあつたが、盗掘者が火災を引き起こし、逃亡したため、墓中の副葬品は残されたという。しかし、火災によって竹簡は散乱断裂し、炭化した竹簡の文字は不明瞭となった。

それが、二千年の時を経て、一九七三年に発見されたのである。翌一九七四年、竹簡は中国の国家文物局に移送され、保護と整理が進められた。一九七六年六月、中国の文物出版社が学者を招き、河北省からも人員が出たが、同年七月の唐山大地震で中止となり、竹簡の一部が散乱し毀損した。ただ、それ以前の抄録作業によって、すでに、『論語』をはじめとする古代文献が含まれていることが分かっていた。

一九八〇年四月、国家文物局古文獻研究室の主催により、定州漢簡の釈読事業が継続されることになり、まず『論語』の整理が進められた。そして、一九九三年、『論語』の釈文と校勘記が完成し、ようやく公開されたのである。

竹簡は全六二〇余枚あるが、右のような事情で残簡が多い。簡長は一六・二センチ（当時の七寸）、幅〇・七センチ、字数は一簡あたり一九〜二一字が記されてい

る。竹簡には上中下の三箇所に竹簡を綴じた横糸(三道編縫)の痕跡が見られる。総字数は七五七六字で、今に伝わる『論語』の二分の一弱の分量である。

中山懐王劉脩は前漢宣帝の五鳳三年(紀元前五五年)に亡くなっている。とすれば、これは、紀元前五五年を下限とするテキストということになるが、その亡くなった年に筆写して副葬されたものとは考えにくい。恐らくは、劉脩自身が生前大切にしていたものなのであろう。そこで、このテキストについては、おおむね前漢高祖(劉邦)期頃に筆写された写本ではないかと推測されている⁽³⁾。いずれにしても、すでに当時、ほぼ現在のよくな内容を持つ『論語』が伝えられていたことが明らかになったのである。

学而篇から堯曰篇まで、すべての篇が一応残っているが、総字数から推測されるとおり、篇によってはわずかな分量しか残っていないものもある。最も少ないのは学而篇で、わずか二十字。最多は衛靈公篇の六九四字で、現行本の七十七パーセントにあたる⁽⁴⁾。

結論を先に言えば、この定州簡『論語』テキストは、現行本『論語』テキストと内容的には大差がない。もちろん、異体字や誤脱などは多く、細かなものまで含めれば、異同は全部で七百箇所以上にのぼる。また、章の区分けについても現行本と異なる点が多い。しかし、それでも、このテキストは明らかに現行本の祖本の一つと考えられる。それほど内容は類似しているのである。

ただ、詳細に見ていくと、興味深い違いもあるので、検討を加えてみよう⁽⁵⁾。

なお、以下、「……」部分は、竹簡の断裂により、文字および文字数が確認できないことを示し、「」内の文字は、唐山大地震の前にカードに記録されていたが、現在は竹簡の損壊によって確認できない語句、「」内の文字は、竹簡本では確認できず、現行本などによって補ったものであることを示す。また、該当章の『論語』現行本(原文・書き下し文)を先にあげ、その後竹簡本を掲げて対照してみることにする。

まずは、文字の異同に関するものである。

子曰、「為政以德、譬如北辰居其所、而衆星共之」。(為政篇)

子曰く、「政を為すに徳を以てすれば、譬^{たと}えば北辰^{ほくしん}の其の所に居て、衆星の之に共^{とも}するが如し」。

これに対応する竹簡本は、次のようになっている。

子曰、「為正以德、辟如北辰……」

大きな違いではないが、二つのテキストを対照してみると、竹簡本は、「政」を「正」に、また、「譬」を「辟」に記していることが分かる。これは、両方の文字の音が同じで字形も類似していることから、当時相互に

通用していたことを示しているであろう。

同様の現象は多数見られ、例えば、有名な「温故知新」章も次の通りである。

子曰、「温故而知新、可以為師矣」。(為政篇)

子曰く、「故きを温めて新しきを知れば、以て師為るべし」。

これが竹簡本になると、こう記される。

……温故而智新、可以為師矣。

つまり、「知」と「智」の通用が確認されるのである。こうした音通や字形の類似による通用関係は多数見られる。我々の想像以上に、当時は緩やかに文字が通用していたのであろう。

誤写と思われるものもある。

子曰、「攻乎異端、斯害也已矣」。(為政篇)

子曰く、「異端を攻むるは、斯れ害あるのみ」。

この部分、竹簡本では、こうなっている。

子曰、「功乎異端、斯害也已」。

「功」は字形の類似による誤写であると思われる。

「攻乎異端」は異端を治める(専攻の攻)という理解と異端を攻撃するという解釈とがある。いずれにしても、異端に対して批判的な見解を述べている部分である。なお、穿った見方をすれば、竹簡本は、「異端に功ありとするは」と読めないこともない。その場合も、異端に功績があると評価するようなことは害悪だという意味になり、結果的には大差がなくなる。ただ、恐らくは誤写であろう。

次に、誤写かどうか判断に苦しむものもある。例えば、「社」と「主」との違いである。

哀公問社於宰我。宰我对曰、「夏后氏以松、殷人以柏、周人以栗。曰、使民戰栗」。(八佾篇)

哀公、社を宰我に問う。宰我对えて曰く、「夏后氏は松を以てし、殷人は柏を以てし、周人は栗を以てす。曰く、民をして戦栗せしむ」。

「哀」公問主於宰我。對曰、夏后氏以松、殷人：：「以栗、曰」、使民戰栗也。

漢代には、「魯論」「齊論」「古論」という三つの『論語』テキストが並行していた。その内、「魯論」はこの冒頭部分を「問主(主を問う)」に作っていたとされる。だが、「古論」では「問社(社を問う)」と記し、やがてそう記すテキストが定着していった。「社」

とすると、土地神を祭るやしろの意味になるが、定州簡や「魯論」では、木「主」（位牌）についての質問であったことが分かる。これは単なる誤写ということではなく、味内容の違いを示しているのではなからうか。

また、時代を反映した文字の相違も見られる。

邦君為兩君之好、有反坫。管氏亦有反坫。（八佾篇）

邦君は兩君の好を為すに、反坫有り。管氏も亦た反坫有り。

孔子が「管仲の器は小なるかな」と、斉の管子を批評した有名な一章である。竹簡本は、これを次のように記す。

國君為兩君之好、有反坫。管氏……

注目したいのは、冒頭の「邦君」と「国君」の違いである。意味内容は同じであるが、「くに」の字が異なっている。これは、竹簡本が漢の高祖劉邦の諱を避けて、「邦」を「國」に改めたものであろう。いわゆる「避諱」の現象である。

一九七三年に湖南省長沙で発見された『老子』テキストでも、「邦」と記すべきところを「國」に書いている。このルールは漢代には定着し、歴代王朝にも引き継

がれた。定州簡『論語』は、こうした避諱のルールが定着し始めた前漢初期のテキストである。もともと、定州簡本の中には、「邦」字をそのまま使っている箇所もあり、このルールがまだ徹底していなかったことも分かる⁽⁶⁾。ただいづれにしても、そうした時代を教えてくれる現象である。

一方、個々の文字ではなく、分章（章の区切り）について新たな知見を提供してくれる箇所もある。まず、現行本の二つの章を連続して示してみよう。

見齊衰者、雖狎、必變。見冕者與警者、雖褻、必以貌。兇服者式之。式負版者。有盛饌、必變色而作。

迅雷風烈、必變。（郷党篇）

齊衰の者を見ては、狎れたりと雖も、必ず変ず。冕者と警者を見ては、褻と雖も、必ず貌を以てす。凶服の者には之に式す。負版の者に式す。盛饌有れば、必ず色を変じて作つ。迅雷風烈には、必ず変ず。

升車、必正立執綏。車中不内顧、不疾言、不親指。

（郷党篇）

車に升るには、必ず正しく立ちて綏を執る。車の中にては内顧せず、疾言せず、親指せず。

前の章は、孔子が相手によって行動を改めたことを記

し、後の章では、車に乗るときに所作を記している。この二つの章は、現行本では、右のように分章されている。ところが、定州簡『論語』では、一つの章として連続して筆写されている。

実は、この章の二つ前の章には、「曰く、我に於いて殯せよ」という孔子の言葉があり、それに続いて、「寝ぬるに尸せず、居るに客づくらず」という孔子の様子を記したと思われる章があるので、この「斉衰の者を見ては」の章も孔子の言動を説明したものであると考えられている。だが、後の章は、「孔子」とは書いていないので、孔子の言動なのか、一般論なのか、判断に苦しむところである。しかし、定州簡のように連続して筆写していると、これらはいずれも一般論ではなく、孔子の礼の所作を具体的に記したものである可能性が高くなる。

『論語』の各章をどのように区切るのかというのは時に大きな問題となるが、この箇所などは、竹簡本の記載によって、意味内容がより明確となる端的な一例である。

このような分章の違いは、他にもいくつか見られる。最も章数の少ない堯曰篇では、現行本が三章に分けられているのに対して、竹簡本は、末尾に「凡二章、凡三百廿二字」と二章に分けていることを明記している。章の区切りに関しては、少なからぬ違いのあったことが分かる。

こうした現象が生ずるのは、現在のテキストのように、章が改まると一行あけたり、改行したりしないから

であろう。当時の書写の通例によれば、竹簡に筆写する際、分章は「・」印によって行われ、空白を取らず、続いて次の章が記されるのである。文献そのものが終了する場合には、墨節ぼくせつといって「■」という記号を付けたり、墨釘ぼくていと呼ばれる「■」のような記号を打って、その後を空白にすることもあった。しかし、分章については、いちいち大きく改行したりはしないのである。そこで、「・」印を付け忘れたり、逆に多めに付けたりということもあったのであろう。

最後に、孔子の呼称の問題を取り上げよう。これまでの研究では、孔子について、『論語』前半では「子」と呼ばれているのに、後半になると「孔子」とされる場合が多いので、ここに編纂時期の差異を見ようとする立場もある。つまり、「子」とは、直接「先生」と呼びかけているわけで、先生と弟子たちの親密な関係を想起させる。だが、「孔子」と記すと、いろいろな先生がいる中で、それらと区別するためにあえて「孔先生」と呼んでいるわけで、少し師弟の間に距離が感じられるのである。だから、『論語』の前半と後半は別の集団によって編纂されたのであり、時間的には、前半が後半より早いと考えるわけである。

それでは、定州簡『論語』では、この呼称はどうなっているであろうか。先進篇の一章を取り上げてみよう。

季路問事鬼神。子曰、「未能事人、焉能事鬼」。

曰、「敢問死」。曰、「未知生、焉知死」。(先進篇)
季路鬼神に事えんことを問う。子曰く、「未だ人に事うること能わず。焉くんぞ能く鬼に事えん」。曰く、「敢えて死を問う」。曰く、「未だ生を知らず。焉くんぞ死を知らん」。

子路が「鬼神」について質問した有名な章である。これが竹簡本ではこう記される。

【季】路問事鬼神。孔子曰、「未能事人焉能事鬼」。曰、「敢……死」。曰、「未智生、焉智死」。

ここでは、「孔子」と「智」の字が注目される。「智」は「智」の古い字形であるから、古今の字形が通用していたと考えて何ら問題はないであろう。だが、現行本が「子」とする所を竹簡本は「孔子」と記している。

実は、「孔子」と「子」の使い分けは、竹簡本では、それほど厳密ではない。したがって、「子」と「孔子」の使い分けだけによって、『論語』の構造や成立時期を論断するのは、甚だ危険なのである。そのことを竹簡本は教えてくれる。

このように、定州簡『論語』には、個々の文字、分

章、呼称などについて、現行本と細かな違いが多くある。しかしそれにも関わらず、全体としてみれば、ほぼ現行本と同じテキストがすでに漢代初期に定着していたことも分かる。

だが、この一つの写本の発見だけによって、『論語』の完成と定着を強調して良いのか。今少し慎重な判断も必要であろう。定州簡『論語』は、現在の河北省定州市からの出土資料である。しかも、中山王の墓からの出土文献である。穿った見方をすれば、たまたま、この中山王だけが『論語』テキストを持っていたという可能性も否定できない。そこで、次に、もう一つの出土文献を検討することにより、『論語』がどのように伝播していたのかを探ってみたい。

三、平壤簡『論語』

一九九〇年代の初め、北朝鮮の平壤(ピョンヤン)市楽浪区域統一街の貞柏洞三六四号墳から『論語』の写本が出土した。「楽浪」とは、前漢の武帝が紀元前一〇八年に衛氏朝鮮を平定して設置した四つの郡の内の一つである。当時の中国(漢)の領域としては、最も辺境に位置していたと言つて良い。

発見された墓は前漢時代のもので、同墓に副葬されていた戸籍簿に、元帝初元四年(紀元前四五)の記載があったことから、この『論語』は、前漢元帝期以前の写本

であることが明らかである。前章で取り上げた定州簡『論語』は、前漢初期のテキストと推測されていた。この平壤簡『論語』は、それとほぼ同時期か、やや後の写本と考えられる。

平壤簡『論語』は、全三九枚と残簡五枚の計四四枚からなり、先進篇三三枚、五八九字。顔淵篇一枚、一六七字。現在の『論語』先進篇・顔淵篇の約三分の一の量である。『論語』二十篇のうち、わずか二篇が発見されたに過ぎないのであるが、前漢期にすでに楽浪郡という辺境地に『論語』が伝えられていたという事実を明らかにしたのである。

そこで、この平壤簡『論語』の先進篇・顔淵篇を現行本の該当箇所と比較してみることにしよう。結論から先に言えば、これも、先の定州簡『論語』の場合と同じく、多々違いはあるものの、それは大同小異に過ぎないことが分かる。

以下、「……」部分は、定州簡『論語』の場合と同様、竹簡の断裂により、文字および文字数が確認できないことを示し、□□は、文字数を推定できるものの文字そのものを確認できない部分であることを示す。また、【】内の文字は、平壤簡本では竹簡の断裂などにより確認できないが、現行本などを参照して補える文字であることを示す。

まず、文字の異同。これについては、定州簡『論語』と同じく、当時はかなり緩やかな文字の通用関係があっ

たことが分かる。

顔淵死。顔路請子之車以為之椁。子曰、「才不才、亦各言其子也。鯉也死。有棺而無椁。吾不徒行以為之椁。以吾從大夫之後、不可徒行也。」（先進篇）
顔淵死す。顔路、子の車以て之が椁を為らんことを請う。子曰く、「才も不才も、亦た各々其の子と言ふなり。鯉や死す。棺有りて椁無し。吾徒行して以て之が椁を為らず。吾大夫の後に從うを以て、徒行すべからざるなり」。

有名な顔淵（顔回）の死に関わる記述である。「才」の字に注目してみよう。平壤竹簡本では次のようになっている。

顔淵死。顔路請子之車。孔子曰、「材不材、亦各其子也。鯉也死、有棺無椁。吾不徒行以為之椁。以吾從大夫……」

文意に大きな違いはないが、竹簡本は冒頭の「以為之椁（之が椁を為る）」を省略した形になっている。また、現行本に「才」とある箇所を「材」に記しており、「材」と「才」とが通用していたことが分かる。発音も同じで字形も似ていたからであろう。

同じく、顔淵の死の場面。今度は、「慟」と「動」の

通用である。

顔淵死。子哭之慟。從者曰、「子慟矣」。曰、「有慟乎。非夫人之為慟而誰為」。〔先進篇〕

顔淵死す。子之を哭して慟す。從者曰く、「子慟せり」。曰く、「慟すること有るか。夫の人の為に慟するに非ずして、誰が為にかせん」。

「慟哭」と熟して今でも使う言葉であるが、これを竹簡本は次のように記す。

顔淵死。子哭之動。從者曰、「子動矣」。子曰、「有動乎哉。非……」

現行本が「慟」とする所をすべて「動」と記している。慟哭は、声を上げ、身を震わせて激しく泣くことであるから、「動」でも意味はほぼ同じである。しかし、直前に「哭」とあるから、やはり、「慟」の方が相応しい。いづれにしても「慟」と「動」が通用していたことを示している。

次も、漢字の構成要素を共有することによる通用関係である。初めが現行本、後が竹簡本である。

閔子侍側、閭閻如也。子路行行如也。冉有・子貢侃侃如也。子樂。「若由也、不得其死然」。〔先進

篇〕
閔子側に侍す。閭閻如たり。子路行行如たり。冉有・子貢侃侃如たり。子樂しむ。「由の若きは、其の死を得ざらん」。

閔子侍則、訢訢如也。子【路行行】如也。冉子・子貢【衍衍】如也。子樂曰、「若由也、□不【得】其【死然】」。

現行本で「側」となっている文字を竹簡本は「則」と記す。また、現行本で「閭閻」となっている箇所を竹簡本は「訢訢」に記す。ちなみに、この箇所を定州簡本では「言言」と簡略に記している。いづれにしても、「言」を共通要素とする緩やかな通用関係があったことが明らかになる。

少し分かりづらいのは、「而」と「如」である。

季氏富於周公。而求也為之聚斂而附益之。子曰、「非吾徒也、小子鳴鼓而攻之、可也」。〔先進篇〕
季氏周公より富めり。而して求や之が為に聚斂して之に附益す。子曰く、「吾が徒に非ざるなり。小子鼓を鳴らして之を攻めて、可なり」。

魯の家老の季氏の贅沢を、孔子が批判する章である。ここで、現行本は接続詞の「而（而して）」を使っている。

るが、竹簡本は次のように記している。

……也、小子【鳴鼓】如攻之、【可也】。

つまり、現行本が「而」とする箇所を「如」とするの
である。これは決して、「如し」とか「如し」とか「如し」のよう
に読ませようとしているのではない。古代文献では、

「如」と「而」とは通用する。

例えば、『韓非子』の用例。

皆安利に就きて危窮を辟く。皆就安利如辟危窮。

（『韓非子』五蠹篇）

この漢文の「就安利」と「辟危窮」の間に「如」の字
がある。これは、まさに接続詞の「而（而して）」と同
じ用法である。

現代中国での代表的な注釈書である陳奇猷『韓非子集
釈』も、この部分に注を付け、「如は猶お而のごときな
り」と明快に説明している。『論語』でも、そうした通
用が確認されたわけである。

一方、顔淵篇でも、短い章の中に、いくつも文字の異
同が見られるものがある。

子張問政。子曰、「居之無倦、行之以忠」。（顔淵
篇）

子張政を問う。子曰く、「之に居りて倦むこと無
く、之を行々に忠を以てす」。

弟子の子張が政治について孔子に質問する章である
が、これを竹簡本はこう記す。

子張問正。子曰、「【居】之母【倦】、行以中」。

対比してみると一目瞭然である。

現行本……「政」 「無」 「忠」

竹簡本……「正」 「毋」 「中」

「政」と「正」の通用は、定州簡『論語』でも見られ
たが、同様の現象がここでも確認される。「無」と
「毋」は同じ意味の否定詞、「忠」と「中」は字形が近
く、音が同じことによる通用である。

以上は、発音や字形が似ていることによる文字の通用
関係であり、文意の読みとりに大きな違いは生じないも
のである。古代のテキストには、この程度の文字の揺れ
があるのはむしろ普通であり、そうした違いを乗り越え
て、文意は継承されていたと考えられる。

だが一方で、テキストの若干の乱れを示唆してくれる
ものもある。これはやや重要な点である。まず現行本の
記載を記す。

子曰、「由之瑟、奚為於丘之門」。門人不敬子路。
子曰、「由也升堂矣。未入於室也」。(先進篇)
子曰く、「由の瑟、奚為れぞ丘の門に於いてせ
ん」。門人子路を敬せず。子曰く、「由や堂に升れ
り。未だ室に入らざるなり」。

孔子が、弟子の子路の弾く「瑟」（大琴）について批評する一章である。実は、冒頭に「由（子路）の瑟」とある所を、梁の皇侃の『論語義疏』は、「由の鼓瑟」と記している。そうすると、これは子路の奏でる鼓と大琴という意味になり、現行本と少し意味が異なってくる。ところが、平壤簡本は、やはり「瑟」と記している。なぜ、『論語義疏』は、「鼓瑟」としたのであるうか。古くからそう記すテキストがあり、それに従ったまですも考えられる。

ではなぜそのテキストは「鼓瑟」としたのか。やはり疑問が残る。あくまで推測ではあるが、そのテキストは筆写の際、この二つ後の章に引きずられたのではないか。本章の二つ後の章とは、先に紹介した「季氏富於周公。而求也為之聚斂而附益之。子曰、非吾徒也、小子鳴鼓而攻之、可也」(先進篇)である。特に、「小子鼓を鳴らして之を攻めて、可なり」とある所に注目したい。ある程度の長い竹簡になると、複数の章の字句が隣接して筆写されることになる。筆写者は筆写元の竹簡の

「鼓」の字に目移りして、ここも「鼓瑟」と記してしまつたのではなからうか。竹簡本の発見は、そんな推測も可能にしてくれる。

次に、孔子の呼称の問題はどうであろうか。

子曰、「回也、非助我者也。於吾言、無所不説」
(先進篇)

子曰く、「回や、我を助くる者に非ざるなり。

吾が言に於いて、説ばざる所無し」。

孔子が顔回を評した章である。竹簡本は次のように記す。

孔子曰、「回也、非助我者也。於吾言、無所不説」。

現行本は「子」、平壤簡本は「孔子」。ちなみに、定州簡本は「子」である。この違いは、他の箇所でも多々見られ、孔子の呼称に関しては、かなりランダムな使い方だつたと推測される。また、ついでに言えば、現行本も竹簡本も、この同一章の中で「我」と「吾」が併用されていることも分かる。これも古くから「われ」の意味で通用していたのであろう。「子」と「孔子」、「我」と「吾」の違いだけで、テキストの新旧を論断するのは、極めて危険であることを示している。

また、分章については、次のような違いが見られる。現行本で二つの章となっているものを並べて引いてみよう。

柴也愚、參也魯、師也辟、由也喭。
柴也愚、參也魯、師也辟、由也喭。
(先進篇)

子曰、「回也其庶乎。屢空。賜不受命、而貨殖焉。億則屢中」。(先進篇)

子曰く、「回や其れ庶きか。屢空し。賜は命を受
けずして貨殖す。億れば則ち屢中る」。

前の章では、子羔、曾參、子張、子路の人格について、それぞれ短い評言が記されているが、「子曰く」とはなっていないので、孔子の言葉であったかどうかは分からない。後の方は、「子曰く」として、いつも困窮している顔回について孔子が述べた有名な章である。

ではこの二章、竹簡本ではどうなっているであろうか。実は、竹簡本では、この二つは一つの章として連続して筆写されている。念のため、それも引用しておく。

柴也愚、【參】也魯、師也【辟】、由也獻。孔子

曰、「回也其□□。屢空。賜不受命、如□□焉、

【億】則【居】中」。

つまり、これらは、弟子の子羔、曾參、子張、子路、顔回について、孔子が連続して批評した章であったという可能性がある。こうした分章の違いが、平壤簡本にも見られるのである。

しかしいずれにしても、それは、『論語』のテキストが大きく乱れていたとか、現行本とはまったく異なる『論語』テキストが存在していたというようなことを示しているのではない。細かな違いは多々あるとしても、やはり『論語』は、当時すでに定着し、楽浪郡という辺境地にも伝えられていたのである。

このことから推測されるのは、『論語』の伝播力である。平壤簡本の発見は、画期的な意味を持っている。楽浪郡だけに特別に伝わったとは考えにくい。このような辺境地に『論語』テキストが存在している以上、『論語』は、すでに前漢時代には全国に普及し、孔子の思想は知識人や役人に広く知られるところとなっていたのであろう。

結 語

本稿では、出土文献を手がかりとして、『論語』の流传状況について考察を加えてみた。上博楚簡には、『論語』と類似する文言が多々見られ、戦国時代において『論語』の素材が様々に伝承されていたことが推測された。

また、定州簡『論語』や平壤簡『論語』は、漢代における『論語』テキストの伝播が予想以上に進んでいたことを示唆している。『論語』の形成と展開は、戦国時代後半から漢代初期において急速な展開を見せたと考えられる。

もつとも『論語』については、依然として謎が多い。その名称、編纂、伝来。いずれをとっても、それを解明するための手がかりが少ないのである。こうした中で、近年次々と発見されている新出土文献は、その状況に一筋の光明を与えてくれる。出土文献の解析により、貴重な手がかりが得られると言えよう。

注

- (1) 拙稿「上博楚簡『從政』の竹簡連接と分節について」(『中国研究集刊』第三六号、二〇〇四年)、および「上博楚簡『從政』と儒家の「從政」」(同)参照。
- (2) 上博楚簡の筆写時期の詳細については、『上博楚簡研究』(湯浅邦弘編、汲古書院、二〇〇七年)参照。
- (3) 河北省文物研究所定州漢墓竹簡整理小組『定州漢墓竹簡『論語』』(文物出版社、一九九七年)参照。
- (4) 以上の定州簡『論語』に関する基礎的な情報については、注3の『定州漢墓竹簡『論語』』を参考とした。
- (5) 定州簡『論語』は、残念ながら図版が公開されていないので、以下の釈読に際しては、前掲の『定州漢墓竹簡『論語』』の釈文による。

(6) 王沢強「中山王墓出土的漢簡《論語》新論」(『孔子研究』二〇一一年第四期)は、このほか、恵帝の諱「盈」、文帝の諱「恒」、武帝の諱「徹」、昭帝の諱「陵」についても使用されていることを指摘し、この定州簡本が宮廷内で太子教育に使われたテキストとは考えにくく、恐らくは、民間に流伝していたテキストであろうと推測する。しかし、前漢期において避諱のルールがどれほど厳格に適用されていたかは不明な点も多く、必ずしも民間流伝のテキストとは断定できないと思われる。

(7) 平壤簡『論語』の基礎的情報および釈文については、李成市・尹龍九・金慶浩筆、橋本繁訳「平壤貞柏洞三六四号墳出土竹簡『論語』について」(『中国出土資料研究』第十四号、二〇一〇年)を参考にした。